

愛環音楽連盟創立記念演奏会

愛環〔千人の第九〕

ベートーヴェン作曲「エグモント」序曲／「交響曲第9番」

1997年9月7日(日)14:00/愛知県芸術劇場大ホール

主催：愛環音楽連盟・中日新聞社・中部日本放送
後援：愛知県、愛知県教育委員会、岡崎市、豊田市、瀬戸市、春日井市、各市教育委員会、
豊田市文化協会、瀬戸市文化協会、愛知環状鉄道
協賛：中部電力株式会社・トヨタ自動車株式会社

愛環音楽連盟

岡崎フィルハーモニー管弦楽団 豊田フィルハーモニー管弦楽団 瀬戸市民オーケストラ 春日井市交響楽団
岡崎「第九」をうたう会 豊田市民合唱団 瀬戸第九合唱団 春日井第九合唱団

四都市百万市民の音楽の愛の環

－愛環音楽連盟について－

念願の愛環音楽連盟がついに発足した。岡崎・豊田・瀬戸・春日井の各都市を、愛知環状鉄道のレールが二本の赤い糸となって貫いているが、こんどは、この四都市、百万市民の心を「音楽の愛の環で結ぼう」というのが私たちアマチュア演奏家たちの願いである。連盟の目的は、情熱に満ちた完成度の高い音楽を、より多くの市民に提供していくことにつきる。具体的には、運営のノウハウの伝授、技術の研鑽、大曲の合同演奏、団員の交流、華やかな音楽祭など、これまで単独ではできなかった新しい試みをどんどん可能にしていくというもの。要は、みんなで難しい曲を練習して、沢山の人に聴いていただきて、誉めて貰って、打ち上げ会で飲んで騒いで、お得意の自慢話に花を咲かせよう—といういつもながらのアマチュア気質を満足せんがための集まりである。

この二月二日、瀬戸市文化センターで創立記念総会が開かれ、井上博通瀬戸市長を初め多くの来賓の祝意を得てついに愛環音楽連盟が実現した。四都市の市長と議長をはじめ、多くの方たちのご支援とご理解とご参加をいただき、記念行事には愛環鉄道にもご後援いただけたことになった。これ以上望めないほど、幸先良いスタートだ。初代会長には瀬戸第九の会会長柴田恒造が就任し、理事長には準備委員会の委員長であった春日井市交響楽団音楽監督の都築正道が選ばれた。隣接する都市のアマチュアの音楽団体が、行政の枠を越えて、協力し合いながら音楽文化の向上に努めていく開かれた関係は、全国でも珍しく、これまで個別的でありがちな地方都市文化に新しい「横の時代」をもたらすに違いないと自信している。乾杯のあと、努力を共にした仲間が思わず駆け寄って、お互いに握手をし、肩を抱き合い、「おめでとう」を言い合ったら、沢山の愛の環がいとも簡単にできた。一緒に演奏できる強力な仲間が増えたという素朴な喜びは、「この前例のない立派な組織を楽しく仲良く元気に運営していくことができるだろうか」という大きな不安感を上回った。

各都市横並びの組織が可能になるのは、それぞれの都市の総合力がほぼ同じになったときだ。音楽に限れば、年に数回の演奏会を開いている演奏団体がいくつかあり、その数回の演奏会を聴きに集まつてくるに足るだけの基礎的な人口と音楽ファンがいて、演奏会場や練習場といった文化施設も充実しており、プロの指導者も近隣にいて、行政そのものが市民の音楽活動に理解があるといった音楽環境が整っていることを意味する。四都市の中で一番出遅っていた春日井市にも、五年前、アマチュア・オーケストラができ、春日井市制施行五十周年を記念した第九演奏会も昨年で四回を数えた。いま、機は熟したといつていよい。

日頃から、お互いにエキストラとなって交流があるオーケストラ仲間と合唱団仲間が、「それでは…」といって動き出したのが二年前。またたく間に設立準備のための組織が出来上がった。参加するのは、岡崎フィルハーモニー管弦楽団、豊田フィルハーモニー管弦楽団、瀬戸市民オーケストラ、春日井市交響楽団の四つのアマチュア・オーケストラ。それに、岡崎「第九」をうたう会、豊田市民合唱団、瀬戸第九合唱団、春日井第九合唱団の四つのアマチュア合唱団だ。文字通り、いまや大名古屋を取り巻くきら星のごとき衛星都市の文化の顔だ。八団体合わせて会員は千人。それで、「さあ、旗揚げ公演は千人の第九だ」ということになり、そして本日、愛知県芸術劇場大ホールのステージに六百名が登ってベートーヴェンの「第九交響曲」を演奏することになった。指揮者と四人のソリストは、第九生誕の地ウィーンから招いた。ウィーン・シンフォニエッタの常任指揮者クルト・ラブフ氏は、「アマ・オケOK、千人OK」とご機嫌である。ソリストは、若きウィーン子たち。音楽の都からさわやかな風が吹いてくる。これを機に、人類愛を高らかに歌い上げたベートーヴェンの「第九」ではないが、「愛環」の名が象徴するように、「音楽への愛」で結ばれた四都市の友情の環をなによりも大切にしたい。そして、むろん、愛環音楽列車は、みなさまの席も忘れてはいない。

1997年9月7日

愛環音楽連盟

ごあいさつ



愛と平和と人間贊歌を

愛環音楽連盟会長
柴田恒造

本日は愛環「千人の第九」演奏会によこそお出かけ下さいました。

ながい準備の後に誕生した「愛環音楽連盟」は結成と同時に各界の注目を集め、暖かいご支援と多くの期待の高まる中、おかげさまで、ここに創立記念公演を迎えることができました。

また、鈴木礼治愛知県知事を始め、四都市の市長からご祝辞と激励のお言葉をいただきました。地域を越えた新しい音楽文化活動に挑戦する者たちにとってこれに勝る喜びはありません。ご協賛・ご贊助いただきました多くのみなさまにもお礼申し上げます。ありがとうございました。

音楽は恒に人の心のよりどころであり、人を結びつける偉大な力を持っています。特に「第九」は「愛と平和と人間贊歌」をテーマとし、いつも我々に深い感動を与えてくれます。ウィーンからお招きした指揮者、独唱者、沿線四都市の市民オーケストラ、並びに合唱団の大きな“音楽の環”による今日の演奏は、きっとご満足いただけると思います。

私たちは、今後も引き続き音楽文化の創造に努力してまいりますので、みなさまのますますのご声援を賜りますよう、重ねてお願ひ申しあげる次第でございます。

お祝いのことば



時代を超えた
人と芸術の交流を

愛知県知事
鈴木礼治

愛環音楽連盟創立記念演奏会開催を心よりお祝い申し上げます。

また、この音楽連盟の発足にご尽力されましたみなさま方に對し、深甚なる敬意を表する次第であります。

さて、この音楽連盟の名称は、愛知環状鉄道の開通によって、岡崎・豊田・瀬戸・春日井の四都市間の緊密な関係と相互交流が可能になり、より活発な音楽活動が可能になったということに由来するとのお聞きしております、この鉄道の開業に携わり、経営の一端を担うものとして、大変嬉しく存じております。また、これまで、それぞれの都市で活動してこられたアマチュアの音楽演奏団体が一堂に会し、お互いに研鑽、協力し合いながら音楽文化の向上に努めるという試みは、地方都市文化のあり方にも大きな影響を与えるものと期待しているところであります。

「21世紀は交流新時代」と申しますが、文化の発展向上には「交流」ということを抜きにしては考えられません。

本日は、「よろこびの歌」として有名なベートーヴェンの交響曲第9番が、ベートーヴェンのゆかりの地、ウィーンから指揮者並びに4人のソリストをお迎えして演奏されるとのことですが、今日「音楽の都」として世界に冠たるウィーンも、モーツアルトやベートーヴェンを始めとして、ブラームス、マーラーなど、ウィーン生まれではない音楽家たちを中心として、その地位を築いてきたといっても過言ではないと存じます。

新しい世紀を迎えるに当たって、愛知環状鉄道沿線の瀬戸市で開催されることとなりました2005年の国際博覧会は、この地域を「交流」の一大中心地に築き上げていくものと確信いたしております。この博覧会の開催を契機として、愛知環状鉄道も飛躍的に発展するものと存じておりますが、貴音楽団体におかれましても、愛知環状鉄道の発展と共に益々交流を深められて、ご活躍されますよう、また、本日の演奏会が成功裡に終わりますことを祈念いたしまして、私のお祝いと激励の言葉といたします。

お祝いのことば



音楽文化の
発信ステーションに

岡崎市長
中根 鎮夫

本日は、愛環音楽連盟の創立記念演奏会愛環「千人の第九」が盛大に開催されますことを、心からお祝い申し上げます。

このたびの演奏会は、三河と尾張を結ぶ愛知環状鉄道沿線の4市のアマチュアオーケストラと合唱団が一堂に会し、ゲストとして指揮者、独唱者4人をウィーンから招聘して行われることは誠に有意義であり、すばらしい演奏と合唱を堪能させていただけるものと思います。

モノから心へ価値観が変化しつつある今日、優れた芸術や文化に触れたいという人々の要求が高まっています。本演奏会が、愛環のレールを通じて結ばれた沿線四都市の市民レベルの交流を促し、音楽文化を世界に向けて発信するステーションとなることを期待しております。

終わりに、本演奏会のご盛会とご参会のみなさま方のご健勝ご多幸を祈念し、お祝いの言葉といたします。

お祝いのことば



尾張と三河の
交流の促進を

豊田市長
加藤 正一

愛環音楽連盟創立記念演奏会として、愛環「千人の第九」が開催されますことを心からお祝い申し上げます。

思えば今まで、尾張と三河の境は、両地が近隣にありながらなぜかその壁は厚く、お互いの交流をはばんできた感があります。

しかし、念願であった国際博覧会の誘致が決定し、地域あげての結束が必要となって参りました。このような時、愛知環状鉄道によって結ばれている春日井市・瀬戸市・岡崎市・豊田市のアマチュア音楽家の方々が、尾張・三河の壁を越えて相互交流を図り、技術の研鑽に努められることは、誠に意義あることと存じます。この活動が、今後民間、行政を問わず多方面にわたってこの地域の交流を促進する契機とならんことを期待するものです。

おわりに、今回の演奏会開催にご尽力いただいた方々のご努力に深く敬意を表すとともに、愛環音楽連盟の今後のますますのご活躍を祈念申し上げてお祝いの言葉といたします。

お祝いのことば



芸術性豊かな
創造交流都市に

瀬戸市長
井 上 博 通

ようやく秋気の訪れを感じるところとなり、ここ愛知県芸術劇場におきまして愛環音楽連盟創立記念演奏会愛環「千人の第九」が盛大に開催されますことを心よりお祝い申し上げます。

本日は、愛知環状鉄道で結ばれた市民音楽団体による愛環「千人の第九」をお聞かせいただけるということであり、その歌声は必ずや私どもの心に響きわたり、多くの感動を与えていただけるものと大変楽しみしております。

さて、瀬戸市は2005年国際博覧会の開催地に決定いたしました。今後は、博覧会の効果を最大限に活かし、芸術性豊かな創造交流都市づくりを進めてまいりたいと考えております。そのためには、さまざまな地域や人々との交流を通じて文化の振興を図っていくことが重要であり、今回のように音楽を愛するみなさまが市域を越えて交流され、お互いに協力して音楽文化の向上に取り組まることは誠にすばらしいことであります。

今後ともこうした事業を積み重ねられ、地域文化の発展向上に一層のご活躍をされますことを祈念して、お祝いの言葉いたします。

お祝いのことば



国際博覧会のさきがけを

春日井市長
鶴 飼 一 郎

愛環音楽連盟創立記念演奏会愛環「千人の第九」が盛大に開催されることを、心からお喜び申し上げます。

第九演奏会は、近年各地で開催されているといえ、千人もの人々による、一大スペクタクルともいいうべき演奏会が実を結ぶまでには、並々ならないご苦労があったものと思います。何事も新しい企画を実現するには、綿密な計画と行動の積み重ねが必要で、関係各位のこれまでのご努力に対し、深い敬意を表します。

ともすれば名古屋志向、行政の枠にとらわれがちな文化活動にあって、愛知環状鉄道で結ばれた4市のアマチュアのオーケストラと合唱団が、行政区域の枠を越え、心をひとつにした手づくりの大演奏会を実現されたことは、画期的なことだと思います。今回の演奏会は、近隣市民の音楽交流のみならず、音楽の本場ウィーンから指揮者やソリストを迎えた国際的交流の場でもあります。これはまさに、新しい形の地方からの音楽文化の発信であると言えましょう。

2005年には愛知県で国際博覧会が開かれます。成功に向むけ、行政はもとより市民レベルでの近隣市町の提携がますます必要になるものと思います。愛環音楽連盟の創立と今回の演奏会は、その先駆けともなる大変意義深いことといえましょう。この活動がさらに広い分野に波及し、より豊かな都市文化の一層の交流に繋がることを願ってやみません。

さて、「ゆとりある豊かな生活をきずく健康都市・春日井」を目指す春日井市は、「魅力ある市民文化の創造」をその重要な柱の一つに掲げています。愛環音楽連盟の活動を通じ、本市の音楽文化が新しい刺激を受け、一層活発となることを期待しております。

最後に、本日の出演の皆さまには、日頃の練習の成果を遺憾なく発揮いただき、文字どおり歓喜の歌声が響きわたりますよう、愛環音楽連盟にあっては、一層の組織の充実と活動の拡大を祈念しまして、お祝いの言葉いたします。

愛環音楽連盟創立記念演奏会

愛環「千人の第九」

ベートーヴェン作曲

Ludwig van Beethoven (1770-1827)

「エグモント」序曲

"Egmont" Overture

「交響曲第9番」

"Symphonie nr.9." Op.125.

I Allegro ma non troppo, un poco maestoso

II Molto vivace

III Adagio molto cantabile

IV Presto

指 挥：クルト・ラブフ Kurt Rapf Conductor

ソプラノ：エリザベート・フレッヒル Elisabeth Flechl Soprano

アルト：エリザベート・ランク Elisabeth Lang Alto

テノール：オリヴァー・リンゲルハーン Oliver Ringelhahn Tenor

バス：アンドレア・マルティン Andrea Martin Bass

演 奏：愛環音楽連盟

岡崎フィルハーモニー管弦楽団

岡崎「第九」をうたう会

豊田フィルハーモニー管弦楽団

豊田市民合唱団

瀬戸市民オーケストラ

瀬戸第九合唱団

春日井市交響楽団

春日井第九合唱団

ゲスト演奏者紹介



Kurt Rapf
Conductor

クルト・ラプフ（指揮者）

ウィーンの音楽一家に生まれました。ウィーン音楽アカデミーで学び、指揮とピアノとオルガンとハープシコードと作曲をマスターして卒業しました。すぐに「コレギウム・ムジクム・ウィーン」を結成して指揮者をつとめ、世界各地の演奏旅行で大成功を納めました。それ以後、指揮者やピアニストとして、多くの大歌劇場や有名ソリストたちから依頼を受け協演を実現しています。オルガニストとしても第一級。インスブルックの音楽監督もつとめ、欧米の音楽祭で指導的な立場をとっています。TVや放送でも活躍。ドイツ・グラムフォンやデッカなど、多くのレコード会社からCDをリリースしてその名は世界中に知られるようになりました。1970年から1987年までウィーン市の音楽局長をつとめ、1980年にオーストリア作曲家連盟会長に選ばれています。1981年のヤマハ国際音楽祭では、日本フィルを指揮して自作の「交響詩」を指揮し、「顕著な作曲家賞」をえて優勝しました。1982年にはオーストリア科学芸術名誉勲章を授けられました。現在は、1986年に設立したウィーン・シンフォニエッタの常任指揮を中心にして、ドイツ音楽の正統的な解釈と表現力で世界に確固たる地位を占めています。



Elisabeth Flechl
Soprano

エリザベート・フレッヒル（ソプラノ）

オーストリア生まれの話題のソプラノ歌手。1993年にウィーン高等音楽院を特別賞を獲得して卒業。ワルタ・ベリーに師事。レパートリーも広く、バッハのカンタータ、ハイドンのオラトリオ、ベートーヴェンの荘厳ミサ曲などの古典曲のほかに、メンデルスゾーンの大曲「エリア」やオルフの「カルミナ・ブランナ」などの異色作も得意としています。TVやラジオにも出演。ドビュッシーの歌曲集のCDも好評。昨年のシェンブルン宮殿の「ウィーン気質」も大成功でした。現在、声楽教師としても高い評価をえています。



Elisabeth Lang
Mezzo-Soprano

エリザベート・ランク（メゾソプラノ）

ウィーン生まれのアルト歌手。高校で音楽と演技を学び、ウィーン大学では歴史と社会学を学びました。1983年にモツアルトの「戴冠式ミサ」でデビュー。ウィーン国立歌劇場のオペラ研究所で学び、国立歌劇場やムジークフェラインやコンツェルトハウスを中心に多くの舞台で歌っています。1990年に日本・韓国・中国・オーストリアなどの演奏ツアーを行い高い評価をえました。現在、ウィーン国立歌劇場やウィーン室内歌劇場やフォールアルベルク劇場などと客演歌手の契約を結んでいる今もっとも活躍中の歌手です。



Oliver Ringelhahn
Tenor

オリヴァー・リングルハーン（テノール）

音楽歴は、アルテンブルクの聖歌隊で指揮者のレオポルト・フリードルの指導を受けた5歳のときから始まります。その後、シューベルト音楽院やウィーン音楽院で学び、ワルタ・ベリーからリートの指導を受けました。現在、リンツ州立劇場やゲルトナーブラツ国立劇場の歌手として契約。ブッファを得意とする実力派のテノールで、この夏はバード・イシュルのオペレッタ・フェスティヴァルに、来年の2月にはリンツで…とたくさんの歌劇場の舞台で活躍中の売れっ子です。オラトリオや宗教曲のリストもつとめます。



Andrea Martin
Baritone

アンドレア・マルティン（バリトン）

ウィーン音楽院で学び、ハンス・スワロフスキイが指導するウィーン国立歌劇場研究所のメンバーとなり、ハンス・ホッター、ワルタ・ベリー、ジョセッペ・タディからも教えを受けました。「マリア・カラス・コンクール」で最終選考まで残り、オペラ歌手としての存在が広く認められ、ヴェニスのフェニチエ座の専属歌手もつとめました。欧米豪の有名歌劇場に出演、サントリーホールで日本公演も行いました。ベルカント・バリトンとしての彼の軽妙で雄弁な歌い方は、ナクソス版CDで知ることができます。

オーケストラ指導者 高橋直史 加藤完二

合唱指導者 吉川朗 練習ピアノ 竹内理恵

愛環音楽連盟加盟団体紹介

■岡崎「第九」をうたう会

1983年6月岡崎文化協会の呼びかけで発足しました。半年間の合唱練習を経た同年12月に、指揮外山雄三氏、演奏名古屋フィルハーモニー交響楽団によって「第1回第九演奏会」を開きました。それ以後、毎年演奏会を行ってすでに14回を数えました。本年は、指揮者に新進気鋭の関谷弘志氏を迎え、12月18日(木)に第15回目の第九演奏会を予定しています。初心者約三分の一を含む200人の会員が、「明るく・楽しく・しっかりと」をモットーに演奏会目指して練習を重ねています。1993年に岡崎市教育文化賞を受賞しました。

■岡崎フィルハーモニー管弦楽団

岡フィルの通称で知られるこのオーケストラは、1972年の創立で本年秋に創立25年を迎えます。発足当時は十数名でしたが、その後仲間が増え、団員の構成も会社員・教員・学生・主婦など幅広く、10代から50代まで総勢80余名の市民オーケストラに成長しました。年2回の自主公演(定期演奏会・ポピュラーコンサート)に加え、岡崎市内を中心にして種々の催しに参加しています。定期演奏会では通常のクラシックコンサートのレパートリーが中心です。ベートーヴェンとチャイコフスキーとドボルザクがトップ・スターの演奏回数となっています。98年の1月25日には、ドボルザク「交響曲第8番」とラフマニノフ「ピアノ協奏曲第2番」を演奏します。ラフマニノフは初めて取り上げる作曲家なので非常に楽しみにしております。ポピュラーコンサートでは、一転して映画音楽やゲーム音楽など、もっとリラックスできる曲を演奏しています。本年は6月1日に勤労福祉会館で、「ドクエ」をメインにしたプログラムを演奏しました。一般にクラシック音楽といえば、難しく堅苦しいと思われており、オーケストラの団員といえば何か別世界の人間と思う人すらいるようですが、岡フィルの団員はひたすら音楽が好きな普通の人間の集まりで、家庭的な雰囲気の中で練習しています。

■豊田市民合唱団

1981年(昭和56年・豊田市民文化会館オープンの年)から毎年末「第九交響曲演奏会」の運営と演奏に関わってきた「第九を歌う市民のつどい」を発展させて、昭和60年1月豊田市民合唱団として発足しました。これまでに「第九交響曲演奏会」を12回、定期演奏会を11回開催してきました。そのほかに、「豊田ジョイントコンサート」「豊田合唱連盟合唱交歓会」「明治村春のミュージアムコンサート」など、毎年のように出演しています。豊田市を代表する合唱団として意欲的に活動をつづけています。今年11月30日(日)午後3時から豊田市のカバハウスホールで「第12回定期演奏会」を予定しています。曲目はモーツアルト作曲「ミサブレヴィスK.194」と三善晃作曲「唱歌の四季」「黒人靈歌」「南太平洋」などです。指揮竹本泰蔵(客演)・神田豊壽。ピアノ杉浦潤子。定期練習は毎週金曜日夜7時から9時まで豊田市中央公民館(豊田市挙母町3-59)。ぜひおいでいただきたく、都築和子(豊田市宮口町2-2-9 Tel.0565-32-7013)までご連絡下さい。

■豊田フィルハーモニー

活気ある街豊田市にふさわしく、まだ10年の若々しいオケです。メンバーも中学生から50代の主婦までいて、上手な人、楽器をもってまだ日の浅い人と多種多様な人が集まっています。しかし、音を出すのが楽しくてしかたがない人ばかりです。毎日曜日の午後になると、豊田のどの工場よりも熱いハーモニーを作り上げています(?!)。一緒に音を出したい方はどうぞいらしてください。定期演奏会では、豊田市出身のソリストのみなさんとも一緒に演奏してきました。地域に一人でも多くの音楽ファンを増やし、オーケストラを楽しんでいただきたいと思って活動しているのが豊田フィルです。また豊田市吹奏楽団と豊田市楽友協会を結成して、三者お互いに助け合って活動しているのも大きな特徴です。来年は、豊田市にまた新しいコンサートホールがオープンします。みなさんと舞台の上からお目にかかるれるのを楽しみにしています。

■瀬戸第九合唱団

1984年(昭和59年)に結成された「瀬戸第九を歌う会」は完成2年後の瀬戸文化センター文化ホールで、12月8日 外山雄三氏の指揮のもとで、文字通り「産声」ならぬ「歓喜の歌」で発足しました。思えばこの「うたう会」の創立が、瀬戸地域に新しい音楽文化の流れをつくる端緒となりました。その後、「うたう会」は多くの音楽団体を生み出し「瀬戸第九合唱団」は以後10年連続してベートーヴェンの第九をうたい続けてきました。その中でも、第4回の1987年に小澤征爾氏を指揮者にお迎えしたことは、瀬戸第九合唱団として永遠に思い出となるものです。数々の思い出を刻みつつ1993年に「第九10回連続演奏」という金字塔を残して一応のピリオドを打ちましたが、本年4月27日の「瀬戸市民オーケストラ創立10周年記念第九演奏会」では、長年の念願であった瀬戸市民オケと一緒に「瀬戸市民の手による手作り第九」が実現しました。また、来年は、瀬戸第九をうたう会創立15周年記念の「第九演奏会」が計画されていて、さらなる飛躍を目指しています。

■瀬戸市民オーケストラ

1984年に「瀬戸第九をうたう会」が出来ました。その弟として「市民オーケストラ」が出来ました。1988年に、第1回定期演奏会を開き、ドヴォルザーク「交響曲第8番」やメンデルスゾーン「真夏の夜の夢」を演奏しました。それ以降、毎年定期演奏会を開いています。94年の特別演奏会では、指揮者に吉田年一さんとアントニーン・キューネルさんを招いて、ドヴォルザーク「チェロ協奏曲」(チェロ:マルティン・シュカンバ)やブルームス「大学祝典序曲」を演奏しました。その他に、92年より毎年小中学生音楽鑑賞会「ようこそ音楽村へ」を開いています。「運命」「新世界」の名曲やアニメのポピュラーヒット曲もレパートリーに入っています。今年の4月には、瀬戸市民オーケストラ10周年記念に「瀬戸第九」を開催しました。ワーグナーの歌劇「リエンチ」序曲。とベートーヴェン交響曲第九番「合唱」です。指揮は吉田年一さん。コンサートマスターに西田博さんを迎えた。合唱は瀬戸第九合唱団でした。

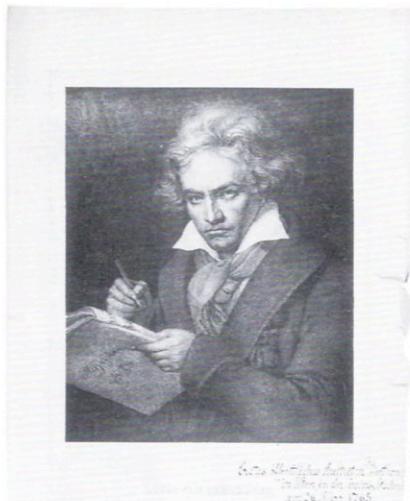
■春日井第九合唱団

1993年(平成5年)12月の春日井市市制50周年第九演奏会に出演した春日井市民を中心に関成された合唱団です。それ以降、毎年12月に開かれている春日井市民第九演奏会に、200名の大合唱団として出演しています。創立以来、ベテランの合唱指揮者吉川朗先生の熱心な指導に加えて、団長の荒川昭代のおおらかな人柄とそれを支えるスタッフの優れたリーダーシップが、経験豊かな合唱団員を勇気づけ、心のこもったダイナミックで質の高い演奏を生み出しています。愛環音楽連盟の成立を心から喜び、友好の環の中で、ほほえみあふれる友情と新たなレパートリーと広い活躍の場が開けることを一番楽しみにしている合唱団です。

■春日井市交響楽団

愛環音楽連盟の中で、もっとも若い7歳のオーケストラです。愛称はカボ。「カスオケ」ではありません。1990年(平成2年)11月に春日井市初のアマチュア・オーケストラとして誕生しました。翌年創立記念演奏会を開き、以後毎年、春日井市民会館で多くの市民を集めて定期演奏会を開いています。今年の7月で6回目を迎えました。ここ数年、指揮は竹本泰蔵先生です、春日井市制50周年記念の「春日井市民第九演奏会」には、石丸寛氏の指揮で、新しく結成された500名の春日井第九合唱団とともに、128名の大編成で参加しました。初挑戦ながら難曲の「第九」を見事に演奏して好演でした。春日井第九も今年で6回。団長の花村浩克を中心に55名の団員の活躍は春日井市の音楽文化の顔としてますますその重要性を高めています。今回の愛環「千人の第九」では、豊富な経験と具体的なノウハウと優れた技術を持つ三都市の優れたオーケストラから多くの刺激を受けながら、新しく拓けた愛環音楽文化活動の一員となって、地域文化にさらなる貢献を可能にしたいものと意気込んでいます。

ベートーヴェンと演奏作品のお話・



ベートーヴェンの生涯

ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェンは、1770年12月16日、ケルン市に近いボン市の貧しい家の屋根裏部屋で生まれました。父は美声の持ち主で宫廷楽団でテノール歌手を務めたり、ヴァイオリンを教えたりしていました。幼児期から父やネーフェから音楽教育を受けられたベートーヴェンはすぐにその才能をしめしましたが、青年時代に母の死に衝撃を受け、さらに失職した父に代わって家族を養わねばならず、ベートーヴェンの苦難の一生ははやくも始まったといえます。唯一の慰めは、プロイニング家その他の友人と交遊で、そこで知ったゲーテ・シラー・シェークスピア・カントなど芸術と思想、そしてフランス革命の理念が彼に深い影響を及ぼしました。1792年にウィーンに移り、ハイドン・シェンクなどに師事するかたわら、「ピアノ三重奏曲」(Op.1)・「ピアノ・ソナタ」(Op.2)・「ピアノ協奏曲第2番」(Op.19)などを作曲しました。また貴族のサロンや公衆の前でのピアノ演奏も有名になり、貴族の後援を得て、革命に続く政治的不安の中にも作曲を続けました。ピアノ・ソナタ「悲愴」、交響曲第1番・第2番などが彼の初期の作品の代表的なものです。1800年代に始まる彼の中期は、耳の病気に始まり、有名なハイリゲンシュタットの遺書が書かれましたが、彼は困難を克服し、「英雄」「運命」「ワルトシュタイン」など、傑作を次々と生み出していきました。しかし次第に世俗との交渉を絶ち、自己の内面に沈没し、Op.109のピアノ・ソナタ、弦楽四重奏曲、「荘厳ミサ曲」「第九交響曲」など、精神的に深い作品を残し、1827年3月26日ウィーンでの世を去りました。

「エグモント」序曲 Op.84

ラモラル・エグモントは1522年11月18日に生まれ、1568年6月5日、48歳でスペイン軍に処刑された、実在のオランダ貴族出身の軍人です。オランダにおける新教の普及とオランダの独立の基礎を創った志士であります。ドイツの詩人ゲーテは、エグモントの史実を題材にして、5幕の悲劇を12年かかって書き上げました。ウィーンの宮廷支配人ヨーゼフ・ハルトルに依頼されて、ベートーヴェンはゲーテへの敬愛をこめてこの悲劇に作曲しました。1809年暮れから翌年にかけてのことです。原戯曲の指定通り序曲を含めて10曲の劇音楽「エグモント」の初演は、1810年5月24日、ベートーヴェン自身の指揮でウィーンのブルク劇場で行われました。この時ベートーヴェンは39歳でした。序曲はソナタ形式で書かれ、壮大なドラマの幕あきにふさわしく、逞しく、勇ましさと悲壮美にあふれ、瞬時に私たちをゲーテとベートーヴェンの劇的な世界に誘う、名曲中の名曲です。

「交響曲第九番」二短調 作品125 「合唱つき」

「交響曲第九番」二短調作品125は、ベートーヴェンの9曲の交響曲の中で最後の作品であるばかりでなく、内容・構成とともに、交響曲の歴史の上で大きな意義を持った作品です。ベートーヴェンは、この1時間をおこる大曲第4楽章に、シラーの詩「歓喜に寄せて」を用い、交響曲に言葉と思想をあたえました。ドイツの大诗人シラーが、人間の愛と喜びと平和、神への崇敬をうたった讃美歌「歓喜に寄せて」を完成したのは1785年、そして翌年、自分の主宰する雑誌に発表したとき、ベートーヴェンはまだ16歳、生まれ故郷のボンにいました。この時すぐにこの詩がベートーヴェンの目にとまつたかどうかはわかりませんが、当時のボンの青年の間で、この理想主義的な詩は、人生の道しるべとなりました。また、1793年、ベートーヴェンの友人フィッシャーリヒ教授がシラー夫人におくった手紙には次のことが書かれていました。「ボンには将来有望な若い作曲家がいます。彼は偉大で崇高なものに熱中しており、シラーの『歓喜に寄せて』の全部に曲をつけようとしています」。「歓喜に寄せて」の詩に作曲することは、ベートーヴェンの生涯を通じての計画でしたが、思いついてから完成までに長い年月がかかりました。第9番目の交響曲を作曲している時も、一度は器楽だけの終楽章を書きました。(この音楽は後に作品132の弦楽四重奏曲の中に用いました。)作品の中に人間の声を用いることを試みながら、なかなか決断がつきませんでした。終楽章のバリトンのレシタティーヴォも、有名な「歓喜のテーマ」も楽器でしようとした。「歓喜に寄せて」を歌うことを「第10」か「第11」の交響曲まで延期しようかと迷っていたのです。

生涯にわたって、貧乏や偏見や甥の裏切りや耳の病気など、数々の責苦に傷つけられたベートーヴェンは、それゆえに「歓喜の頌歌」を歌いたいと熱望していました。「苦惱を通して喜びに至る。」これは彼の生涯にわたるテーマでした。しかも人間の声で歌われなければならない。そう思いながら決心がつきませんでした。多分、人間不信の念が彼の心の奥にあったのでしょう。それでも、同時期に作曲した「荘厳ミサ曲」で自信を持ったのか、ついに「第九交響曲」の終楽章でシラーの「歓喜に寄せる頌歌」を歌わせることになったのです。思いついてから完成まで、30年以上の年月がかかったことになります。そしてこの「第九交響曲」が彼の最後の交響曲になったのです。ベートーヴェンが生涯の夢を果たしたのは、彼の最後が間近に迫った時期だったのです。

「第九」は神の御業だったのでしょうか。私たちは「人類最高の音楽的な偉業」を、間一髪の瞬間に手に入れることができたのです。ベートーヴェンは「歓喜の歌」をこの世に贈るべくこの世に生を受け、その仕事に彼の生涯をかけ、ギリギリのところでその仕事を成し遂げたのです。

「第九」の初演は、1824年(53歳)5月7日、ウィーンのケルントナートール劇場でベートーヴェン自身の総指揮で行われました。しかし、既に聴覚を失っていた作曲者を補佐するため、ウムラウフという指揮者が実際の指揮をしました。

億万の人々よ 抱き合おう
全世界にその大いなる愛をあたえよう
同胞よ 星空のかなたに
愛する神はかならず住みたまうのだ

神が人間にあたえようとする喜びの歌です。「第九」を聴くたび、「第九」を歌うたび、私たちは「第九」から、自己を高め、精神を解放し、仲間を愛する力を、あたえられる思いがするのです。

(都築和子・豊田市民合唱団)